

情報を自分に結びつけて思考・対話する力を育み その「国語力」を使って生き方も模索する

読む・聞く・話す・書くことを通して考えることは、国語の授業の基本であり、すべての学びにも通じるものと言えます。生徒がそうした言語活動のための「国語力」を培いながら、自分の生き方まで模索する、という授業実践をご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／西山俊哉



国語
算 美和子先生

私立高校教員、公立高校講師を経て、埼玉県立高校の教員に。2012年度より埼玉県教育委員会とCoREFの共同プロジェクトに参加。大学の研究者や県内の教員と協同学習やジグソー法を用いた授業の教材開発に取り組む。今後は「県内外の先生方との教材共有」も目指したいという。

生徒に対する想い

**学びに壁をつくらない国語力と
生き方を柔軟にとらえる感性を**

春日部女子高校の算先生は「生徒にはとにかく幸せになってほしい。そのためにも情報を力にしてほしい」と思っている。だから国語の授業では、次のような力を伸ばそうとしている。

- ・文章を読み、または話を聞いて、与えられた課題や自分の課題を解決するための情報を取り出す(情報収集力)
- ・取り出した情報を鵜呑みにせず、自分の体験や既有的知識と結びつけて考える(情報活用力・批判的思考力)
- ・情報を見聞きして考えたことを、人に伝えるように話す、書く(表現力)
- ・そのように「課題と正対しながら読む・聞く・話す・書く」ことをチームで行い、一人では解決できない課題であっても前に進める(協調問題解決能力)

「私はこうしたものが『国語力』であり、『生きるために必要になる力』だと考えています。例えば現代文の授業で扱う評論には、科学論も記号論も芸術論も宗教論も出てきます。生徒がこうした文章から必要な情報を取り出し、自分に結びつけて考えられるようになれば、この先もさまざまな学問に親しんでいきます。将来、仕事や私生活で課題にぶつかったときも、自分で情報を集めて活用し、課題解決を目指せます。学びに壁をつくら

ず自分の間口を広げていく、そのための基礎となるのが国語力だと思うのです」

その国語力を使って、生徒が文学や評論にふれることで、自分や他者を見つめることや、これからの生き方を考えることとしてほしい、と算先生は思っている。

「本校の生徒は明るくて良い子ですが、さまざまな葛藤も抱えています。それでも場の空気を壊さないよう、『負の感情は出しちゃいけない』と気持ちに蓋をしようという面もあって、自分を抑え込んで疲弊していないか、心配になることもあるんです。だから生徒たちには、文学や評論を自分に結びつけてみんなで読むことで、『自分の中の他者』『自分の周りの他者』『時代や場所を越えた他者』を発見するという体験をしてほしいのです。そして人の心の不可思議さを実感したうえで、他者とのつながりの中でいかに生きるかを、たくましく考えてほしいな、と」

授業の実践

**生徒一人ひとりが役割を担い、
情報を持ち寄って文章読解**

読むことで自分や生き方を見つめる、という点では、教科書に出てくる夏目漱石の『こころ』は、高校生がふれるのにぴったりな作品だと算先生は感じている。その『こころ』を2年生が学ぶ単元において、算先生はジグソー法(※1)を用いた2時間連続の授業を取り入れている。次

(※1) 東京大学CoREFが開発した知識構成型ジグソー法。東京大学CoREFについては60p欄外も参照。

のような形式で行う協調学習だ。

まず、本時の主たる「問い」を設定し、その問いを解くのに役立つ、視点の異なる題材も3つ用意する。授業の前半戦は、生徒がグループに分かれてそれらの題材のいずれかを読み解き、話し合ったことを「あとで自分だけでも説明できるように」準備する。次いで後半戦は、それぞれの題材に取り組んだ生徒が1人ずつ揃うグループに再編成。その新グループで各自が前半に議論したことを伝え合っ

て共有し、その多面的な情報を組み合わせ、大本の問いに迫っていく。
「前のグループで話し合ったことを、どの生徒も次のグループで自分が説明しなければいけない、というのがキモですね。授業に参加する一人ひとりが大切だ、という場にするので、役割を果たそうと各

自が主体的になることを狙っています」

文学で先人の知恵にふれ 自分の人生に役立てていく

今回、算先生が設定した問いは「高校生が『ころ』を読み、学ぶ意義は何か」というもの。授業の冒頭では、この問いを生徒が個々に考えてワークシートに記入する時間も取ったが、難解なだけに、書きあぐねる生徒が目についた。続いて2〜3人のグループで、ワークシートを使って次のいずれかのテーマを考えた。
Aのグループ：本文から「私」の性格がわかる部分を抜き出し、人物像を考察。
Bのグループ：本文から「K」の性格がわかる部分を抜き出し、人物像を考察。
Cのグループ：小野正嗣『文学の未来』の評論抜粋を読み、文学の意義を考察。

その後グループを再編成。A、B、Cを考えた各生徒が揃った3人組になり、情報共有しながら、次の課題に取り組んだ。

「私」や「K」に共感できるころ、共感できないころはどこか。改めて、「高校生が『ころ』を読み、学ぶ意義は何か」。話し合いが進むと、生徒たちは情報を持ち寄って考えると新たな気づきが生まれることに手ごたえを得て、時間延長を希望するほど議論にのめりこんでいった。「Cの班で考えたのは、昔と今では作品を読んだ印象が違ってくるから、読むことを介して、時代と場所を越えて自分に目を向けられる、っていうこと」

「深いね、なんかかっこいい」
「：最初は『K』派だったけど、考えていくと『私』派なところもあるかも」
「そこでCの話がくるんだよ！ 今まで

の経験によって、作品を読んだときにどう思うかが変わるってことじゃない？」

最後は全体での情報共有と個人ワーク。各グループが考えたことを発表し（左の囲み参照）、それを受けてもう一度、『ころ』を読む意義を生徒が個々に考えた。こうした授業を通して、算先生は「生徒がただ字面を追って『テキストを読む』のではなく、『テキストで、先人の知恵を読む』ようになる」ことを目指している。

「どんな文章にもそこには作者が伝えたかった何かが込められていて、自分の体験に結びつけながら読むと、自己の内面にも変化が生じます。その過程で、本が人を助けてくれることもあれば、生きるヒントをもたらしてくれることもあります。だから、文学や評論を読むことはキャリア教育にもつながる、と思っているのです」



授業の前半は、2〜3人のグループで、用意されたA、B、Cのいずれかのワークシートに挑戦。算先生から「わかりにくいときは絵や図にすると関係が見えてくるよ」というアドバイスを受けて、話が進展したグループもあった。その後、トランプのくじで席移動。



授業の後半は、A、B、Cについて考えた生徒が1人ずつ揃った3人組で、前半に話し合った内容をお互いにシェア。おのおのが持ち寄った情報を基に、設定された問いを考え、最後に各グループが発表した。

ワーク後の各班の生徒の発表(抜粋)

(登場人物の)「私」に共感できるところは、人を裏切ってまで恋してしまうのは、好きだからしょうがないのかな、と思いました。でも相手によるというか、Kは仲のいい友達で、友達も大事だから共感できないところもあって。難しい。『ころ』を読み、学ぶ意義ですが、高校生の今だからこそ失敗談から学べるというのかな、と思いました。

「私」に共感できるのは、Kに先に「お嬢さんが好き」と言われたら、自分も後から言うのは難しいところ。共感できなかったのは、親友のKを裏切って「お嬢さんと結婚したい」と奥さん(お嬢さんの母)に言ったことです。Kに共感できるのは、「私」に「お嬢さんが好き」と伝えたときに、初恋だから思いがあふれすぎて相手の表情を見ていなかったこと。『ころ』を学ぶ意義は、学校でみんなで読むと、人によって思うことや感じることは違うから、いろいろな見方や考え方への理解を深められることかな、と思いました。

「私」は、自尊心が高くて本当は弱い人間ということ、打ち明けられない人間だと思いました。Kも同じで、精神的に向上したいけど本当は弱くてさびしくて、いろいろな気持ちから自殺してしまったのだと思います。『ころ』を読む意義ですが、人間の精神的に不安定で弱い部分がこの作品では表現されているので、高校生という精神的に不安定なときに読むと、勉強になるんじゃないかな、と思いました。

『ころ』を学ぶ意義は、3つ出て。一つ目は、文豪の有名な小説を読むこと。二つ目は、人間の本来の本質としての負の感情を知ること。三つ目は、これが一番大きくて、読むたびに感想が変わるので、そうなるのは「自分が変わっている」ということなので、「自分の新しい感情に出会う」ということを体験できるから読むのだと思います。

春日部女子高校(埼玉・県立)



School Data

普通科・外国語科/1911年創立
生徒数(2018年度) 965人(女子のみ)
進路状況(2017年度)
大学275人・短大8人・専門学校/
各種学校25人・就職4人・その他8人
〒344-8521 埼玉県春日部市粕壁東6-1-1
TEL 048-752-3591
URL <http://www.kasujoh-h.spec.ed.jp>

Outline

目指す学校像は「高い志を持ち、夢をあきらめない生徒の育成を目指す、伝統ある進学校」。普通科と外国科があり、オーストラリアへの夏季語学研修を実施するなど、国際理解教育も重視。また、「総合的な学習の時間」を、次期学習指導要領を先取りして「総合的な探究の時間」とし、地域との連携による課題解決学習に取り組んでいる。



図書館との連携でも 生徒の学びを広げていく

学校司書
染谷佳代子先生

本校の図書館では、図書委員の生徒と司書の私が、本の展示や貸し出し業務を担当しています。図書館には先生方も本を借りにくるので、その際に授業の予定をお聞きし、時期を合わせて関連本を展示することもしています。夏目漱石や和歌のコーナーを作る、といったようにです。

授業の話し合いや調べ物のために、図書館を利用される先生も増えました。家庭科の授業では、世界の料理について十分に調べられるよう、近隣の学校からも本を借りて資料を揃えましたね。また、本校の総合学習では、地域の方を10人ほどお呼びして学ぶことを行うのですが、その方々から参考図書をお聞かして展示するようなこともしています。

こうした授業をきっかけに、生徒が関連本を読んでもくれると嬉しいですし、生徒が「図書館に来る」ということ自体にも価値を感じています。「うちの図書館にはこんな本や漫画があるんだ」と知って、手に取って、そこから生徒の学びが広がることもあるからです。

「まだ『足りない』と思うから
自ら学び続け、助けも借りる」

算先生が教師にあこがれるようになってからは、小学4年生の時だった。「体育の授業で跳び箱の台上前転をやったのですが、運動は不得意で絶対無理、と思っていたんです。でも担任の先生が『支えるから跳べ！』と授業中ずっと付き合ってくれて、一人でもできるように頑張ったんですよ。その時の感激は今でも覚えていますし、『先生って人を変えられるんだ』と子ども心に思ったんです」

授業ができるまで

「教師として『足りない』ことが多い」という自覚があるので、周りに助けってもらって、自分でもインプットを続けていかなければ、と思うようになったんですよ」

夏目漱石『こころ』の授業の構成も、まさにその姿勢で作りに上げたものだった。春日部女子高校に赴任して2年目に、校長の薦めもあって、埼玉県教育委員会と東京大学のCoREF(※2)の共同研究プ

ロジェクトに参加。大学研究者や県内の教員と一緒に教材開発に取り組んだ。その活動は埼玉県の「未来を拓く『学び』プロジェクト」に継続され年ごとに発展、9年目の今では県内の133校652名の教員が参加する規模になったのだが、算先生は初期から現在に至るまで、自分の授業案にメンバーから意見をもらい、磨くことを、積極的に進めてきたのだ。「今回の『こころ』の授業案は5回練り直しました(笑)。メンバー同士で情報交換できるサイトに素案を投げたところ、東大の先生が『問いを考えるのに持ち寄る3つの題材が、今のままでは構造的に無理があります』と指摘してくださいました。題材をどうするか悩みました。そこで先生方にも意見を求めると、ある先生が『うちで使う教科書に載っているこの評論はどうか』と教えてくださり、それをCの題材に取り入れたんです。授業をやってみて、『こころ』を読んで学ぶ意義とは、という難しい問いを考えるのに、Cの題材がピッタリとはまった、と感じています」



1 他の教員からも専門家からも学び 国語の授業の中身を磨いていく

算先生は埼玉県の「未来を拓く『学び』プロジェクト」で、大学研究者や教員と意見を出し合い、授業づくりを進めている。また、振り返りに使える民間手帳のモニター募集があると、手を挙げ、生徒と共に活動の振り返り方も学んだ。最近ではNHKの話し方セミナーに参加、朗読の仕方について発見があったという。

2 発問への予想解答まで考えてみて 生徒の思考が本当に深まるか自問する

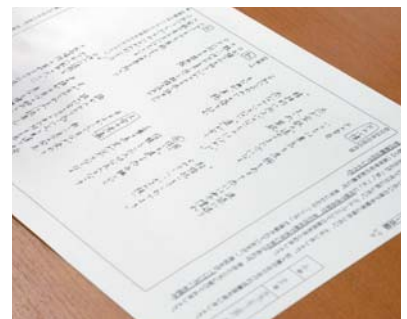
ジグソー法の授業を行う際は、算先生はワークシート作成後、高校生になったつもりで全問を解き、予想解答まで書き込む。生徒の経験や知識量で読み解けそうか。この発問とこの発問は生徒の中でうまく結びつくか。そうしてより良い発問に仕上げてこそ、授業中に生徒の思考や議論も深まるからだ。

3 意見交換後の「私たちの考え」の発表を 生徒に求め、2つの安心感をもたらす

ジグソー法の授業を、算先生は毎時間ではなく節目の授業や効果的と思えるタイミングで実施。普段は講義と「ご近所同士で相談して発表」する形式で進めている。意見交換後の発表にすると、「自分の意見を相手が受けとめてくれた」「発表で間違えても一人ではない」という2つの安心感をもたらせるからだ。

4 授業をより良くする起点として 生徒一人ひとりの見取りを重視

『こころ』の授業は公開授業で行い、大学の研究者や他校の先生も見学。その際は、算先生の言動ばかり見るのではなく、見学者で分担して、個々の生徒の様子を見取することを何よりも重視。授業後の研究協議で、生徒にどんな変化や躰ぎがあったかを全員で共有し、おのおのの授業改善に生かそうとしていた。



ワーク中、算先生は「言葉は消えていくから聞いたことはメモして」と何度も促す。結果、シートにはみんなで議論したことがかなり言語化されていく。



図書館の出入り口付近に展示された夏目漱石の関連本。授業が終わると、さっそくこのコーナーに手を伸ばして、本を借りていった生徒がいた。

(※2) 東京大学CoREFは、全国の教育委員会・学校と連携して、学習科学を基礎とした授業研究プロジェクトを展開する組織。

生徒はこう変わる

読む・聞く・話す・書くなかで
課題の解決策や生き方を模索

漠然としていた自分の思いが、最後は
納得できる形でたくさん書いて驚いた

— 今日のような授業をどう感じていますか？
「話し合うと眠くならなくて楽しいので、私は好きです」
「毎回やると疲れそうだけど、節目にあるといいなと思います」
— Cのグループは、読んだ文章が難しくなかったですか？
「難しかったんですけど、みんなで意見を出すと、わかることがあって、そうやってわかっていくのは楽しかったです」
— 2回目の話し合いで考えが深まったことはありますか？
「最初は推すなら『K』とか言っていたのに、共感する部分話すうちに、あれ？『私』のほうが自分に似てない？ となって」

「中学の時こうだったよね、とか、三角関係だとかなる、とか、そういう話の話題もどんどん出てきて、めっちゃ楽しかった」
「だから、授業の前までは、なんで教科書に恋愛話載っているんだらうと思っていたのですが、人の心理がこまかく表現されていることがわかってきて、『漱石すごい』ってなりました」



2年3組の皆さん

「『ところ』を学ぶ意義も、最初は『有名な作品だから』と1行しか書けなかったのに、最終的には自分でも納得できる感じで5行ぐらい書いて、びっぴりしました」

「『ところ』の授業を行うにあたり、算先生は、COMPが開発した様式を基に、「見取りの観点シート」というものも自作した。」
「どんな資質・能力を育みたいか」「それは授業中にどのように発揮されるか」を簡潔にまとめた一枚のシートだ。
その観点から見ても、生徒は授業中に育みたい力をうまく発揮したといえる。
例えば「情報収集力」。登場人物の性格や文学の意義について、生徒それぞれが文章を読んで情報を取り出していた。「情報活用力・批判的思考力」。その情

報のどこに共感できて、どこには共感できないか、自分と結びつけて考えていた。「協調問題解決能力」。生徒同士で「それってこういうこと？」などと対話をしながらお互いの考えを深めていた。「問題発見力」。生徒から「課題に出てこなかったお嬢さんの性格も気になる」「漱石の他の作品も読んでみたい」という声があがり、新たな疑問や興味を抱いていた。
このように、読む・聞く・話す・書くなかで情報収集や問題解決をする「国語力」については、授業を通して、生徒自身もその大切さを実感したようだ。ある生徒は「他の人の意見を聞くことでわかることがあった」と語り、別の生徒は「自分の思いを人に正しく伝えることの難しさに気付いた」と感想を寄せた。
また、生徒のワークシートからは、個々

人のなかで「読みの熟成」がなされ、文学を通して自分や他者を見つめることや、生き方を考えるところまで、学びが深まった様子も見てとれた。
「高校生が『ところ』を読み、学ぶ意義は何か」。この問いに、授業の冒頭では「友人と同じ人を好きになっちゃいけない」とシートに記した生徒は、協調学習を終えたあとでは、このように回答している。
「負の感情が生じたとき、どうすれば一番良かったのかを考える」
「対照的な二人の感情にふれ、心情の変化を学び、今まで知らなかった自分の感情、問い、存在に気付く」
「自己を作る手助け」
今後、算先生としては、こうした授業の質をさらに高めていきたいそうだ。
「授業をより良くするには、生徒の観察から始めることが大事だと思っています。授業中に躓いている生徒はいないか。原因は発問がわかりづらいせいなのか、生徒の既有知識では読み解けないことが多いからか。その課題にワークシートや事前授業の工夫で対応し、生徒がより生き生きと活動できるようにしていきたいか。教育研究家の大村はまさんは、著書で『教師が支えても、生徒が自分でできるようになったと思うのが一番いい』といったようなことをおっしゃっているんですね。私の原点は台上前転で『先生が自分を変えてくれた』ことですが、目指す授業としては、こちらが視点を少し与えれば『あとは生徒が自分で走り出していく』ような学びを実現させたいと思っています」



思い描いている授業のあり方

目指す生徒像

- 国語だけでなく、さまざまな学問についても、文章を読むことや話を聞くことを通して、自ら学んでいける
- 仕事や私生活で課題にぶつかっても、必要な情報を収集・活用し、周囲と対話を重ねながら解決していける
- 文学や評論を読むことを通して、自分や他者のことを見つめ、どのように生きていかも考えていける

実社会にあるものとの連動

学習内容に合わせて今に通じる課題を問う。例えば、
・ 森鴎外『舞姫』では「人生に必要なのは愛か、地位や名声か、友情か」を。
・ 『平家物語』の「忠度の都落ち」で「命をかけて自分の作品を残す心情」を。

国語の授業

国語力を使って
生き方を考える

・ 文学や評論を読むことで先人の知恵にもふれて、生き方のヒントを得ていく。
・ 文学や評論を読んで考えたことを、対話を通じてシェア、みんなで生き方を考える。

国語力を
育む

・ 文章を「読む」または話を「聞く」なかで情報を集め、自分に結びつけて考える。
・ 自分の考えを「話す」または「書く」ことで、他者とも意見を交え、思考を深める。

他の教育活動との連携

ジグソー法の授業は、他の国語の先生や他教科の先生も実施。LHRで「自分の限界を超えるには」という点を考えた際もジグソー法を活用した。

総合学習の「職業インタビュー」などでも、読む、聞く、話す、書く力をフル活用。